

うかの問題にはここには触れない。何故なら、この論文では沖浜の陸地を確認すればこと足りるからである。そうしてその他は別の問題に属する。但し、その陸地の位置と広さとは、この論文では無関心で過せないが、今はそれも深く追求しない。後世に曾て存在した瓜生島の姿を復元したといわれる数種の地図が作られているが、豊府古蹟研究の著者達が種々の点からそれに論難したことがある。わたくしはそれらの論難以上に信頼し難いものであると思う。完全な島であつたかどうかをさえ断じ難い程であるわたくしがただ一つ確信を以て断言できるのは、本文にも説く通りに、沖浜の陸地が慶長元年までは存在したことである。

67、イタリヤ語訳文で *Fanaoqui* と綴られている。何処に比定すべきか疑問である。「ほか一港」とある港の名が記されていない。

68、次註に記す如く、ここに引用するのはイタリヤ語訳文であつて、この沖浜の住人の名を *Barto* と綴られている。ポルトガル語原文から訳されたときに、この日本人の名がイタリヤ語風に誤り読まれたに違いない。

69、この一五九六年のプロイスの長崎から出した年報のイタリヤ語訳版 *Frois, Tartaro*. pp.110-116. 中に、このビヤシエの遭難経験の報告が詳しく載せられている。

70、前引豊府古蹟研究、一六二頁所載。

豊府聞書最古本？

本誌才四号に、久多羅木儀一郎氏が「豊府聞書と豊府紀聞」の題下にその異同を書いてある中に「しかるに豊府聞書としての完本は極めて稀で、私の知つていゝのでは、大分市春日浦増沢近知氏所蔵の只一部だけであつてその裏表紙の内側に「干時文化十二乙亥歲初夏写之」と記されている。」とあるが、筆者所蔵のものには「維時寛政八丙辰歲嶸月中旬於遊焉齋写之」とあるので、増沢本よりも十九年前のものである。未だ増沢本と校合する機会を得ないが、久多羅木氏の引文によると、僅かに字句の相違があるだけである。尚久多羅木氏は「たゞ増沢氏所蔵本によつて、豊府聞書の本書の姿を窺い得ると共に、紀聞といふ書名は、後世において一部の人の手により変えられたものであるから、最初の如く豊府聞書と称するのが、著者の意に適合うものと思ふのである。」と書いてあるが、今のところ私共の知る範囲では最古と思はれる筆者所蔵本にも同じく聞書となつていたので、久多羅木氏の所説は妥当だと筆者も考へる次である。

因に筆者所蔵本には裏表紙内側に大城氏と後書してある。なほ筆者本に「於遊焉齋写之」とあるのは後に安政四年に北ノ丸の近説旧宅を文武の道場として設けた遊焉館と何等かの関連があるのではあるまいか。

(立川輝信記)